

自我の形成過程

－保育所・家庭にみる2歳児の「ものの取り扱い」の様相－

入江 礼子

(鎌倉女子大学)

(はじめに)

1995年3月1日現在の保育所に入所している1～2歳児の在籍人数は39万9868人(平成6年度「社会福祉行政業務報告」厚生省より抜粋)で、これは同年齢の子どもの約16%にあたる。男女雇用機会均等法制定(1986年施行)により、多様な就業形態で働く女性の増加あるいは、その継続を望む女性の増加を考えると、この数は今後ますます増えるであろうことは想像に難くない。また、地域の子育て支援の一環として保育所が地域の子育てセンターとしての役割を期待されはじめた(「保育所等地域子育てモデル事業 1993」等)。保育所が今まで以上に子育ての重要な場となってきたのである。ところが、従来子どもが家庭で育つということと、保育所で育つということのそれぞれの特徴について具体的に検討されていることが少ないように思う。このような状況をふまえて、保育所で子どもはどのような「自我の形成過程」をたどるのか、また家庭ではどうなのかということを、事例を検討しながら考えていきたい。

両者に共通する部分、あるいはその違いを明らかにしていくことで、保育所が家庭との連携や、子育て支援センターとしての役割を担うときに重要な「子どもと親の育ちを支える視点」を豊かにするうえで参考になればと考える。

(目的)

2歳児(ここでいう2歳児は1歳後半から3歳前半までを指す)と共に生活していると、彼らがささいと思われることで感情が大きく揺れ動いているのを経験する。ものの取り扱いは日常茶飯事であり、おとなから見ると聞き分けがないと思える行動も多い。この時期の子どもを育てるのには特別の配慮を必要とするが、子どもの感情的な動揺は、ときにはそばにいるおとなの心にも葛藤を引き起こす。これは家庭でも、2歳児保育を担当している保育所でも経験されることである。津守(1984)は2歳児のこの時期を意識の世界である「自我」が顕著に現われる時期と特徴づけ、「自我のめばえ」の時期と呼んだ。このときの体験は心的イメージとして把握され、のちの自我形成の原点であるというものである。

ここではまず【ものの取り扱い】や【ものを貸せない】ことを自我形成の原点としてとらえ、保育所と家庭での

事例を比較検討していくことで、双方の特徴をあとづけてみたい。

(資料および方法)

- (1) A子(1978.1.8生まれ 第1子)の2歳当時の育児記録(記録者は母親である筆者)
 - (2) 東京都江戸川区のF保育園での保育参加観察記録(1996.11月～継続中)
- (筆者は保育参加観察者として、週1回主に1～2歳クラスに入っている)

(1)の資料は母親として、直接家庭での保育にかかわったときのものであり、その日の出来事のうち印象に残ったもの、困ったこと面白かったことなどを書きためたものである。(2)の資料は、F保育園側のご好意により、自由に子どもたちとかかわりながら、観察者の目を持って保育に加わったときのものである。家庭での子育てを終えてからの保育参加であったため(1)と違い、家庭と保育所での子どもの育ちの姿に差はあるのだろうかという問題意識を持ちながらの保育観察記録である。

F保育園での保育参加後、2歳児のものをめぐる葛藤場面のうち、印象深かった場面の記録をとったあと、同じような場面の記録を(1)から抜き出すという作業を繰り返した。

(記録と考察)

事例1 チェーリングを取り合う

(F保育園2歳児クラスでの保育参加観察記録)

Y子がままごとコーナーで野菜(布製)を切って食事の支度をしているのをみつけたK夫、M子(3歳0ヵ月)はコーナーに走っていく。私に体をべたべたと寄せてくるS子(2歳11ヵ月)も私の手を引っぱってそちらに向かった。K夫がセーラムーンになりたいということで、小さな風呂敷をつけるのを手伝っていると、「うーん、いやだー、はなしてー」とM子の声。みるとM子とS子が色とりどりのチェーリングの入っている容器をひっぱり合っている。M子は半分泣きべそをかいているが、S子は口をぎゅっとにぎって引っぱっている。どちらもゆずらない。私は様子をみようとするが二人のそばに行った。1～2分したところで、担任のC先生がやってくる。「どちらが先に持っていましたか?」と私に聞かれる。

私は事の始まりの場面をみていなかったの、「あつ、ごめんなさい。見ていませんでした」と答えると、すかさずK夫が「M子ちゃんが先に使ってたよ」と言う。「M子ちゃんが先にもってたの？」(C先生) M子は頷く。C先生はS子の両手をぎゅっとにぎりながら「S子ちゃん、M子ちゃんが先に使ってたんでしょ。だめでしょ、取っちゃ。M子ちゃんが終わったら借りようか」と話す。S子は「いやだー」と大きな声で泣き出す。「M子ちゃんが終わったら使おうね」(C先生)するとS子はその場にひっくり返っての大泣きとなる。一方、先生が自分が先だったと認めてくれたのが分かったのか、M子の泣き声は、S子の泣き声の大きさと反比例するかのように収まってくる。それを見たC先生は「どうしようか？半分こする？」とM子に聞く。M子はうんとうんと首を振る。「Sちゃんも使いたいんだって」(C先生)「うーん…。うん」(M子)「S子ちゃん半分こしてくれるって。よかったね」(C先生) S子は泣きやんでM子から半分(といっても実際は4分の1位)分けてもらう。M子がそれで納得したのどうかはわからなかったが、その後二人は何事もなかったかのように黙々と、それぞれ別々の場所でチェーリングを使い始める。

この事例に出会ったとき、私はなんだか妙な感じを持った。自分の子どもたちが2歳のときの近所の友だちとの取り合いの場面のときの雰囲気と少し違うように思った。そこでA子の2歳のときの育児記録を見直してみた。

事例2 自分のものを貸せない(自宅にて)

(A子2歳3ヵ月の育児記録より)

H子(2歳3ヵ月)の家で遊んだあと、今度はH子がわが家に遊びに来てくれることになる。H子の家とわが家は杜宅の同じ階段の2階と4階である。「H子ちゃんもくる(来て)」とH子にたのんで来てもらったのに、A子は階段をのぼりながらだんだん表情がこわばってくる。家のドアの前に来ると、「だめーっ。H子ちゃんは一」と言う。私が「H子ちゃんに来てほしかったんでしょ。」という、「うん」とこっくりうなづく。来てほしいのだけれど実際の自分の家を前にすると入って欲しくないようだ。私が「来て欲しかったのはAちゃんだったのだから、H子ちゃんになかに入ってもらおうね」と説得するとまた「うん」という。H子は中にはいると、遊ぶものを探し始める。またがって乗れる赤い自動車を見つけてそれに乗ろうとするとA子が飛んできて「だめーっ。それは！Aちゃんのだからー」といって貸さない。私が、H子に代わりの三輪車を持っていくと「だめー！Aちゃん

のだからー」といって貸したがない。私が少し強い口調で「二つもいっぺんに乗れないんじゃないの。だから、貸してあげよう」というとしぶしぶうなづく。H子は三輪車に乗る。A子が「Aちゃん、つかうー」といって、後ろから三輪車を押そうとする。「だめー」とH子。A子は「Aちゃんのだからー」と言う。「Hもう帰る！」とおこったH子は帰り支度をする。「かえっちゃだめー」とA子。「帰るー」とH子。二人とも大泣きになってしまう。結局私は、A子を持たせて泣いているH子を2階まで送って行って、H子の母親に今までの状況を説明してあやまる。H子の母親は、「おたがいさまでしょ。ほら、さっきうちで遊んだときはH子のだからといって、A子ちゃんになんにも貸さなかったじゃない。気にしないで」といってくれた。

事例1も事例2もどちらも2歳児にはよくみられるものの取り合いの場面である。事例1のM子とS子のものの取り合いの際に保育母が問題にしたのは、「どちらが先に使い始めたのか」ということだった。これが問題になったのはチェーリングが「保育園の所有物」つまり「保育園のみんなのもの」だったからである。子どもたちはこれを「自分の所有物」だとは主張していない。先に使っていた方が守られ、後からきたものは納得してもしなくても我慢せざるをえない。

一方、事例2では、A子はたとえ自分がH子より先に使っていなくても、H子が自分の家にあるおもちゃを使おうとすると、すべて「だめー」と拒否している。H子の家で遊ぶときはこの逆のことが起こる。貸せない理由は一つ。それは「自分のもの」だからである。どちらが先に使っていたかという前に「誰の所有物か」ということが問題になっている。事例1と事例2の大きな違いはこの点にある。

(おわりに)

保育所は家庭に代って一日の大半を過ごす場であるが、二つの事例から『ものの取り合い』や『ものを貸せない』場面では、家庭とは子どもが主張できるものが違っていることをみた。事例2では子どもたちは大抵に「じぶんのもの」であることを主張し、友だちの家に遊びに行ったときは、その逆の立場になることが語られている。事例1では保育所ではその主張が表面にはあまり出ず、「みんなのもの」という論理で「順番」という概念が早い時期から持ち込まれやすいという可能性が示唆された。この自我形成の初期に体験される内容の違いをさらに検討することを今後の課題としたい。